

『フランケンシュタイン』,あるいは異者の語り

中野弘美

Narrative Monsterism in *Frankenstein*

Hiromi NAKANO

『フランケンシュタイン』(1818年初版, 1831年改訂版)に登場する異形の生き物は、まさにその醜怪で大柄な肉体ゆえに、さまざまな問題を近年提起しつづけている。人々の想起する「フランケンシュタイン」のイメージは、もはや近代科学のボーダーを越境した不遜な若き科学者には向けられず、怪奇映画やサーカスの主役や脇役をつとめる怪物に対するものとなって久しいが、そうしたイメージのシフトを駆動させた怪物の、視覚上の衝迫力とうらはらの聴覚上の説得力に関しては、まとまった議論がまだまだ少ないように思える。モンスターとその創造主の物語をとおして、作家メアリ・シェリーは、言語をめぐる問いかげを執拗におこなっている。〈見えるもの〉と〈聞こえること〉との関わりあいを問いつけるこの小説の意匠を前景化しながら、その関係からいかに語りが展開され、それが読者にどのような効果を及ぼすのかを、本論では解明してみたい。

周知のようにこの小説は枠物語の形式をとっている。外枠は極地探検家ロバート・ウォルトンが、姉のサヴィル夫人に宛てた手紙から成り、彼はそこでヴィクター・フランケンシュタインとの北極での出会いを語る。内枠ではフランケンシュタインがその数奇な人生をウォルトンに語り、さらにその内側にモンスターがフランケンシュタインに語る話が控えている。¹⁾

語りの入れ子細工の仕掛けでは、語り手と同時に、あるいはそれ以上に、聞き手の存在を忘れてはならない。話す者と聞く者との相互交通を、この仕掛けは前提としているからである。小説のなかの語る行為は、ある種の契約関係を内包している。「私の話を聞いてくれ、なぜなら……………」という言説はほとんどすべて、語る動機への注意を喚起するがゆえに、聞く者はこう自問することになる。「どうして私に話すのか」。²⁾これは、語り手が自らの話を十分に理解してくれる相手として聞き手を捉えているか否かということと、深く関わっている。小説中の三人の語り手はみな、聞き手を「信頼」している。聞き手は事情を心得た客体として、語り手のストーリーを補完するよう想定されている。語りを分節し、言説の裂け目から分泌する欲望を自ら演じるよう、語り手から要請されるのだ。しかし同時に、聞き手は、自らの欲望をストーリーの中に投射する主体として、語られるテキストを自らの色に染め抜こうとする。

しかしながら、語りの問題、つきつめて言えば言語の問題は、この小説の場合、ヴィジュ

アルなものとの密接な連関のなかで特に提起されるべきである。従って議論は、最も内奥の物語から始めるのが妥当であろう。その物語は〈眼に映るもの〉と〈聞こえる声〉との逆説を最も先鋭な形で我々に突きつけているからである。

モンスターによる二つの犯罪——フランケンシュタインの弟ウィリアムを絞殺したことと、その罪をジュスティースに着せ法の下に処刑させたこと——の後、フランケンシュタインは傷ついた心を癒すためアルプスへ向かう。彼は「自然の帝王のこの絢爛たる謁見室」(p.92)を眺めながらモンタンベールを登り、「荘厳な恍惚感に満たされ、魂は翼を得て、この暗い世の中から、光と喜びに向かって、舞い上が」(p.93)ろうとした。³⁾ サブライム・エクスタシーに身をゆだね、歓喜に打ち震え、フランケンシュタインはまさに昇天しようとしていた。その瞬間、彼のサブライムなヴィジョンを完成させると同時に頓挫させたものが、氷原を彼にむかって疾走してくる超人的な生き物の姿であった。この生き物は自然(の素材)から生まれたものであると同時に、自然(の掟)を超えた存在であるがゆえに、自然界の存在を分類する科学上の尺度——特に視覚的な尺度——を使用不能に陥れる。ヴィジュアルな手段ではこの対象を判断することは不可能なのである。この事実は主体にどのような効果を及ぼすのか。

モンスターの出現に対するフランケンシュタインの反応は「私に近づくな！」(p.95)という絶叫であった。さらにモンスターが、自分を造った者から話を聞く権利があると主張したとき、やはり彼は同じように「去せろ！その汚らわしい姿を、私の目の前から消してしまえ」(p.97)と叫んだ。何故彼はこれほどまでに動揺するのであろうか。モンスターは「こうやって消してあげよう、創造主よこうやって、おまえが恐れている姿を消してやろう。それでも話を聞いて、おれに同情をかけることはできるはずだ」(p.97)と語りながら、その大きな掌をフランケンシュタインの目の前にかざす。フランケンシュタインの世界認識を構成する近代の知の枠組みは、おしなべて視覚を土台に構築されてきた。これに対し、視覚を判断基準にすえる関係を他者と結べないことを、モンスターは既に承知している。その経緯は彼の語る話からおいおい知るところとなるわけだが、彼に好意的な応対をしたのは、後にも先にも、盲目のド・ラセー老ただ一人である。二人の関係は言葉のやりとりだけによって成立した。一方、フランケンシュタインとモンスターとの出会いは、〈見えるもの〉と〈聞こえること〉の鋭い対立の構図のなかで成立する。醜悪な身体と説得力に富む声が、この場を支配しているのである。⁴⁾

モンスターは雄弁である。のっけからレトリックの達人ぶりを開陳する。彼は対句と撞着語法を操りながら、ペースに満ちた己の存在をつぎのように語る。

'Remember that I am thy creature; I ought to be thy Adam, but I am rather the fallen angel, whom thou drivest from joy for no misdeed. Everywhere I see bliss, from which I alone am irrevocably excluded. I was benevolent and good; misery made me a fiend. Make me happy, and I shall again be virtuous.' (p.96)

後に知ることになるモンスターの自己教育の中核をなす教科書は、ミルトンの『失楽園』

とプルタルコス『対比列伝』とゲーテ『若きウェルテルの悩み』であった。彼のレトリックの源泉と主張の正当性の根源は、これらの書物のなかにある。さらに重要なことは、小説中最も雄弁に語る存在としてモンスターを設定しているという事実である。このおぞましき異者は、うめき声や怪物じみた身振りで自己を表現するのではなく、論理的で説得力に富む極めてエレガントな言説をとおして自己を表象する。言語動物という意味で、彼は化け物(=非人間)ではありえない。むしろ西欧文化の中枢に位置づけられてしかるべきであろう。彼と対話する者はすべて(もちろん最終的には我々読者も含めて)、<眼に映るもの>と<聞こえる声>との矛盾を体験することになる。

その体験とはどのようなものであったのか。視覚ではなく聴覚をとおして理解するよう説得したうえで、モンスターは話を始める。この時点で彼は自分と創造主の関係を、語り手と聞き手の関係に置き換えることに成功する。契約関係にも似たある種の間の中に自分たちを位置づけるのである。それは、主体間の交通を可能にする一種の関係の網の目であり、言語によって構造化されたフィールドと言ってもよい。モンスターはそれまで排除されてきたネットワークに、独自の方法で参入したのである。語り手になることで、彼は自分のかかえる問題を劇化するとともに、問題そのものを解くモデルを生み出すことになる。関係の網の目に入ることで自体が問題の解決につながるからである。

モンスターの言葉はフランケンシュタインに父親としての勤めを自覚させる。「ここではじめて、自分の作ったものに対する創造主の義務がいかなるものか……と感じたのです」(p.97)。そしてモンスターが話を終えるころには、自分の目の前の生き物にまだ恐怖と憎悪を感じながらも、フランケンシュタインはこう告白せざるをえなくなる。「この言葉はわたしにふしぎな効果を及ぼしました。わたしは同情し、ときにはあいつを慰めたい気にもなったのです」(p.142)。その時モンスターは決定的な要求を突きつける。

'My vices are the children of a forced solitude that I abhor, and my virtues will necessarily arise when I live in communion with an equal.

I shall feel the affections of a sensitive being and become linked to the chain of existence and events from which I am now excluded.' (pp.142-3)

'the chain' というメタファーは様々な装いで繰り返し小説のなかに登場する。人と人との情による繋がりを指すときもあれば、言語とともに成立する話す者と聞く者の関係を示すときもある。「鎖」とは関係そのものを表象している。それはジャック・ラカンの言う「シニフィアンの連鎖」('the signifying chain of language') を想起させ、欲望の媒体としての記号表現へと我々の思考を誘っていく。

アルプスでの出会いとモンスターの語りをとおして、我々はラカンの言う「想像界」と「象徴界」との関係をつねに想起させられる。想像界ではイメージと自己を同一視する。それは、外界のなかに自分と同一視できるものをみつけることによって、統一された自己という虚構をつくりあげる精神の領域であり、「鏡像段階」とも重なっている。ここでは主体は自己を他者として知覚するがゆえに、主体どうしはイデオロギーにも似た魅惑的だ

が偽りの関係を取りむすぶことになる。一方象徴界は、言語を習得することによって主体が参入することになる言語記号から成る領域を示す。これはシニフィアンの連鎖から成り、超越的真理の存在しない領域である。⁶⁾

想像界のなかでは、モンスターは汚らわしい肉塊であることから決して抜け出せない。自分は世界中の誰とも似ていないのだから、外界のなかに自分と同一視できるものをみつけることは不可能である。だが象徴界のなかでは、自分の欲望を言語のなかで産み出すことが可能となる。ただその欲望もシニフィアンの連鎖にとりこまれる以上、終わりなき記号表現の受け渡しのなかで疾走するほかはない。

自らの言語習得にまつわるモンスターの話が、ここで重要な意味をおびてくる。すでに彼は、視覚による関係を他者とり結ぶことの不可能性を経験しつくしてきた。彼の姿を見た瞬間誰でも逃げ惑うか、石をもって彼を追い払うか、どちらかであった。やがてたどり着いたド・ラセー家の納屋のなかで、彼は一家を観察しながら自己教育を開始する。言うまでもなく最大の発見は、人間の言語活動であった。

'I found that these people possessed a method of communicating their experience and feelings to one another by articulate sounds. I perceived that the words they spoke sometimes produced pleasure or pain, smiles or sadness, in the minds and countenances of the hearers. This was indeed a godlike science, and I ardently desired to become acquainted with it. But I was baffled in every attempt I made for this purpose. Their pronunciation was quick, and the words they uttered, not having any apparent connection with visible objects, I was unable to discover any clue by which I could unravel the mystery of their reference. By great application, however, and after having remained during the space of several revolutions of the moon in my hovel, I discovered the names that were given to some of the most familiar objects of discourse.' (pp.107-8)

言語の発見は、モンスターによる他のもろもろの学習項目とともに、啓蒙主義時代の学問論争の枠組みのなかに位置づけることができよう。上述の言説は特に、ルソーの『言語の起源にかんするエッセー』(1756年)における主張との親近性が高いと言われている。⁶⁾ ルソーは言語の起源を必要性にではなく情念においているが、モンスターと言語の出会いも、ド・ラセー家の親子の情愛にその契機をおいている。さらに興味深いことに、モンスターの言説は「言語記号は恣意的だ」とするソシュールの主張とも呼応しているかにみえる。記号とその指示対象との間にはなんら直観的なつながりがないことを、モンスターは問わず語に言及しているのだ。つまり、言語がシステムであること、意味は記号からその指示対象への動きとして生まれるのではなく、他の記号との関係の中で意味が決定されることを、モンスターは把握するのである。

こうして言語は、モンスターにとって、他者と関係をむすぶ道具であると同時に、関係そのもののモデルとして存在することになる。それは彼が排除されてきた「生活やできご

との鎖」そのものなのである。彼が人間社会から排除されるのは、普通の人間に似ていないからである。人間／非人間の二項対立は、「人間は人間である」という脆弱なトートロジーを隠蔽する必要上、非人間＝欠陥人間＝怪物をつねに産出することで、そのアイデンティティを確認してきた。⁷⁾ つきつめれば「人間は非人間ではない」ということになるのだが、人間が言語動物であるのだとすれば、非人間は言語を自由に操れるはずがないわけである。ところがモンスターは、人間と非人間を仕切る切断線を易々と踏み越えている。だとするならば、人間を人間たらしめてきた土台とは何だったのか。フランケンシュタインを動揺させた真の原因はここにある。

一方モンスターは、自分に「欠落」している人間性を埋め合わせる装置として、「言語という神業」を捉えている。このシステムに参入すれば、化け物の領域（それは関係の欠如であり孤絶の世界である）から脱出できると彼は判断する。人間的な情愛を経験するために不可欠のもの、それがモンスターにとっての言語であったことは、つぎの言葉からもみてとることができる。

‘I easily perceived that, although I eagerly longed to discover myself to the cottagers, I ought not to make the attempt until I had first become master of their language, which knowledge might enable me to make them overlook the deformity of my figure.’ (p.109)

モンスターの言語習得は、キリスト教化したアラブ人サフィの語学教育と平行して進められる。ドイツ語使用圏でのフランス語教育を我々は英語で読むわけだが、このような状況設定そのものが、この小説における言語の問題の重要性を映しだしている。やがてモンスターは読むことを学び、前述の三つのテキスト——プルタルコス、ゲーテ、ミルトン——をとおして、人間社会のこと、人間個人のこと、そして人間を超えた宇宙のことを、それぞれ字義通りに理解していく。なかでも『失樂園』は、モンスターが自らの存在そのものを位置づけるうえで、極めて重要な意味をもってくる。

彼はアダムと同じようにユニークな創造物であるが、アダムと異なりそもそも始めから神＝父に見捨てられている。むしろサタンに近い存在であると自分を見ている。しかしながら『失樂園』を我々の議論のなかに位置づけると、想像界と象徴界とのかかわりのなかで特に検討をようするのが、モンスターとイヴとの比較であろう。水たまりに映った自分の姿を見た彼はつぎのように語る。

‘I had admired the perfect forms of my cottagers - their grace, beauty, and delicate complexions; but how was I terrified when I viewed myself in a transparent pool! At first I started back, unable to believe that it was indeed I who was reflected in the mirror; and when I became fully convinced that I was in reality the monster that I am, I was filled with the bitterest sensations of dependence and mortification.’ (p.109)

これと鏡のように響きあうのがイヴの誕生した日の彼女の言葉である。湖の水面に映る自らの姿を彼女はつぎのように語る。

As I bent down to look, just opposite,
 A Shape within the wat'ry gleam appear'd
 Bending to look on me, I started back,
 It started back, but pleas'd I soon return'd,
 Pleas'd it return'd as soon with answering looks
 Of sympathy and love; there I had fixt
 Mine eyes till now, and pin'd with vain desire,
 Had not a voice thus warn'd me, What thou seest,
 What there thou seest fair Creature is thyself,
 With thee it came and goes; *Paradise Lost*, Book 4 (460-69)

この一節はオヴィディウスのナルシスはもとより、ラカンの鏡像段階をも思い起こさせる。ナルシシズムはひとつの誘惑である。自分自身のイメージに魅了されたイヴは、神＝父の声がなかったならば、そのまま欲望に身をゆだねることであろう。言い換えれば、イヴは法を発見することによって、自らのイメージへの欲望を断つのである。⁸⁾ それは幼児が父の発する禁止命令に従うことで、文化システムのなかに参入できることと、構造的に相同であろう。イヴが想像界にとどまり続けければ、ナルシス同様溺死するほかに道はない。アダム＝他者との関係を構築することもない。これと同じ構造がモンスターにもあてはまるのは、既に想像界と象徴界との関係でみてきたとおりである。

フランケンシュタインの実験日記を読んだモンスターは「神は、あわれんで、人間を美しく、魅力的に、ご自分の姿に似せてお創りになった。なのに、おれはおまえの姿にきたならしく似せられてあり、似ているからこそ、いっそう恐ろしくさえある」(p.126)と呪った。想像界にとどまる限り、彼が人間社会のなかに参入することは不可能である。

言語を習得したモンスターは、盲目のド・ラセー老とつかのまの親交を結ぶことになる。しかし家族が帰って来て家のなかの光景を見たたん、アガサは気絶し、サフィは逃げ惑い、フェリックスはモンスターに襲いかかった。やがて一家は逃亡し、モンスターは家屋に火を放ち、自分を産み出した者を探しに旅立つ。

このへんで我々は、母親に関する考察に入らなければならない。フランケンシュタインの弟ウィリアムを殺害したとき、モンスターは犠牲者の首飾りの肖像に気づく。「それはとても美しい婦人の肖像だった。悪意にあふれていたおれの心は、優しくなり、その画に引きつけられた。しばらくの間、おれはその婦人の深いまっげにふちどられた黒い瞳、美しい唇を、喜びを感じて見つめていた」(p.137-8)。その肖像はヴィクター・フランケンシュタインの亡き母親の画である。興味深いことに、この小説では多くの母親が死んでいる。フェリックスとアガサとサフィには母親がない(だからモンスターは「母」という単語を知らない)。ヴィクターの母親はエリザベスから移された猩紅熱で死んだ。そして

モンスターには父親しかいない。亡き母の肖像は、従って、根源的な欠如、あるいは存在の裂け目を表象することになる。男児の欲望の対象としての母親の不在は、モンスターの場、極めて特異なエディプス・コンプレックスの色合いを帯びていくからだ。

彼は隠れ場所を探してとある納屋へ入る。するとひとりの女——ジュスティーン・モリッツ——が眠っている。「その女は若かった。おれがもっていた肖像画の婦人ほどには美しくなかったが、それでも感じのよい顔立ちで、若さと健康の美しさに輝いていた」(p.138)。眠れるイヴの耳元で囁くサタンのように、彼はそっと甘い言葉をかけるが、目覚めた後の騒動を懸念して企てを変更し、肖像画をジュスティーン・モリッツの衣服に忍ばせその場を去る。その際モンスターはこのように言う。‘The crime had its source in her; be hers the punishment.’ (p.138) この言葉にはどこかひっかかるところがある。時間的な順序からいってジュスティーンはウィリアム殺害の「原因」にはならないし、また「彼女たち」と複数形にしているのは何故なのか。無意識のロジックをここに認めることは不可能か。彼女とは母親そのものを指すのではないだろうか。父＝法の禁止命令によって母への欲望を断たれた子供＝モンスターは、別の対象にそれを振り向ける。しかしこの置換もラディカルに検閲されるため、性的なドライブはいきおい死のドライブ、すなわちサディズムへ向かわざるをえない。盗まれた肖像画はこのとき、愛の贈り物から憎しみのギフトへと記号内容を変える超越的なシニフィアンとして機能しているのではないだろうか。母親とその代替物の問題は、モンスターがフランケンシュタインに突き付けた要求へと受け継がれていく。

欲望が限りないものであり、シニフィアンの連鎖のなかで最終到達点を見出すことが不可能であるなら、女のモンスターを造れという要求は、果たして欲望を最終的に充足させるものなのだろうか。語る生き物にとって、愛の裏側には要求がある。聞き手に話を受け取ってもらいたいという要求がある。問題なのは要求の中身ではなく、要求が無制限であることだ。語り手が最後に望むものは、聞き手にその望みを植え付けることではあるまいか。モンスターは根源的な性的対象の欠如と特異な鏡像段階を経てきた。何故彼は女のモンスターを執拗に要求するのであろうか。失われたナルシズムを新たに産出するために「女のわたし」を切望しているのだろうか。そうだとすると既に彼は語る生物として象徴界に参入しているのだ。だとすれば、父親にどこまでも話を聞いてもらうこと、認めてもらうことが彼の望みになるはずであろう。

女のモンスターは結局誕生しなかった。それはフランケンシュタインによる去勢の身振りと捉えてよいかもしれない。二者のあいだのアゴーンはここから加速する。モンスターはフランケンシュタイン自身の「生活やできごとの鎖」を切断していく。ウィリアムとジュスティーンの後には盟友ヘンリー・クラヴァル、次に花嫁エリザベス（初版では従妹、改訂版では義妹）が殺される。伴侶を拒絶されたモンスターはフランケンシュタインの（近親相姦的）欲望を遮断する。こうして二者は互いの欲望の裂け目を補い合うかのような関わりかたを繰り返す。一方が「おまえはおれの創造主だが、おれはおまえの主人なのだ」(p.162) と言えば、他方は「全能を憧れた大天使のように、わたしは永遠の地獄に鎖でつながられています」(p.204) とサタニックな自らの存在を自覚する。語る行為を成立させる話し手と聞き手の関係は、欲望の相互感染という事態を招いてしまう。根源的な欠如から

起動する欲望はシニフィアンの連鎖をとおして、もうひとつの欲望（あるいは欲望の亀裂）を掻き立てる。いったんモンスターの語りの聞き手となった者は、いやおうなしにモンスターリズムに感染していく。それを断つにはモンスターの要求に答えるしかない。しかしモンスターの渴望を満たすものを産出することが、その要求に答えることになるとすれば、彼の話を書く者を永遠に産出する以外に道はない。こうしてこの小説の語りは構造化されていく。

モンスターはフランケンシュタインに伝染し、ウォルトンはフランケンシュタインから感染する。それは奇妙な信頼関係を形づくり、語りは次々と受け継がれていく。ウォルトンはフランケンシュタインによく似ている。この極地探検家は、知られざる世界に魅せられた者であり、プロメテウスの偉業に憧れる者である。そしてまた彼は孤独である。フランケンシュタインと出会って初めて、彼は人間どうしの関係に参入できた。それはまるで、失われた自分の半身に邂逅したアンドロギュノスのようである。ではウォルトンの話は誰が聞き届けるのか。手紙の宛て先はサヴィル夫人になっている。それは単なる宛て名以外のなにものでもない。しかし彼女のキャラクター描写の欠如そのものが、我々読者一般を表象してはいまいか。

モンスターリズムは感染する。果てしないシニフィアンの連鎖にのって、語り手から聞き手へと欲望が双方向に受け渡される。『フランケンシュタイン』という小説では、補填されることのない欲望のありようがそのまま主題化されている。モンスターとは何か。内側から外側へ語りの枠組みを押し開いていけば、答えはみつかるのだろうか。「おれは……」と語り始めるモンスターの声に耳を傾ければ、答えが出てくるのだろうか。我々の議論をとおして明らかになったことは、モンスターリズムが、声をもつ身体に端を発し、醜い肉塊がエレガントな言語を操ることに対する我々の動揺によって構成されているということである。「人間は言語動物である」という言説が覆い隠してきた、人間／非人間の階層構造、すなわち神に似て均整のとれた身体をもつ西欧人だけが、「自然に」エレガントな言語世界を構築できるといった暗黙の前提を、その動揺ははからずも露呈させる。

優美な身体が優雅な言葉を語るのは自然なことではなく、言語・文化システムによる効果にほかならない。我々はモンスターの体現する〈眼に映るもの〉と〈聞こえる声〉の逆説を、ラカンの理論を援用しながらみてきたが、それはどうやら、言語の網の目のなかで、満たされることのない欲望を次々と語り継ぐことだけが、成しうるすべてかもしれないというもう一つのパラドクスに、我々を誘いこんでしまったようである。語る行為そのものが、この小説をして、ゴシック・ノヴェルズの常道を逸脱させている。話す者と聞く者との関係が、主体そのものをいかに構成しているか、この小説はそれを常に問い続けているのである。

註

1. 語りの構造を図式で示すと次のようになる。{ [O] }
2. See Roland Barthes, *S/Z* (Paris, 1970), pp. 95-6.
3. テキストは Mary Shelley, *Frankenstein or, The Modern Prometheus*, (Penguin Popular

Classics, 1994) を使用した。なお邦訳は白田昭氏訳 (国書刊行会, 1979) を使わせていただいた。

以下原書からの引用箇所はブラケットで本文中に表示する。

4. See Peter Brooks, 'What is a Monster?' in Fred Botting (ed.), *Frankenstein* (Macmillan, New Casebooks, 1995), p. 83.
5. See Jacques Lacan, *Écrits* (Paris, 1966), Akan Sheridan (tr.), *Écrits, a selection* (New York, Norton), pp. 93-100 and 493-528.
6. See David Marshall, *The Surprising Effects of Sympathy* (Chicago, 1988), pp. 178-227.
7. 今村仁司, 『近代性の構造』 (講談社, 1994), 104~220ページを参照。
8. See Brooks, pp. 87-8.